

## 95 「タオ」

2018年 母の日、我が家に一匹の犬を迎えた。息子から母の日のプレゼントとして。彼は数年前から犬を飼っていて、時々私の家で預かったりしていた。チワワで名は「タオ」という。

息子によれば、漢字で「道」と書きそれを中国語読みで「タオ」と読むのだという。なかなか凝った、意味深げな名前を付けるものだと思っていた。

ある日、偶然書棚の端から「**タオ 老子**」加島詳造 という文庫本を見つけた。息子が残していった本だ。「タオ」の名は、この本からきているのだと直感した。本の帯に「さりげない詩句で語られる人間の大道(タオ)とは? 老子の世界」とあった。

息子のタオは、来ると1~2週間いてまた帰っていく。何回か預かるうちに、その犬が可愛くて妻がまた家に来ないかなあ、、、などと言い出し始めた。

そんなことが伝わったのか、とうとう母の日にプレゼントとなって我が家に1匹の犬が来たのである。「ちょっと待てよ!」時々預かるのと、飼い犬としてずっと世話するのは全く違うではないか!と言ってももう遅い。実はこの件、私には事前に長男から相談があった。彼としても、いくらプレゼントとはいえ、突然犬をプレゼントして要らないといわれては困る。多分妻は、事前にプレゼントすると言われたら、“要らない”と言うに決まっている。そこで、私に打診したのである。

それにしても、大胆なプレゼントを思いついたものだ。最初、いい加減にしろ!という気持ちもあったが、母を喜ばせたいという気持ちが強くあったのだろう。自分で飼いたいと思うほど、妻は犬が好きなのだろうか?という不安と、少し有難迷惑な感もあるが、それもまた面白いかもしれない、、、という気持ちもあり、結局受け入れることにした。勿論、プレゼント当日まで妻には内緒である。

後で訊くと、その時点で既に犬は買ってしまっていたとのこと。もし、固辞されたら自分で2匹飼うつもりだったという。せっかく二十数万円(後日判明)もする犬をプレゼントしてくれるというのに、その気持ちを無にして断ることはできない。

プレゼントの当日、妻の驚きようは大変なものだった。

驚きと困惑で、やはり“要らない”ときた。同じチワワで、生まれて約半年の幼犬だった。顔はキツネのように見え、失礼だが一見したところあまり可愛いとは言えない。

贈られた仔犬にそんなこと言っては可愛そうだと思い直し、飼ってみることにした。息子も、もしどうしても手に負えないようだったら、引き取るとまで言ってくれた。

専門のトレーナーによる訓練も手配してくれ、至れり尽くせりだ。犬を飼うのは初めての経験で、飼い始めてみると慣れるまでは戸惑いが多かった。エサやトイレのしつけ、犬の習性などの知識も必要になる。犬のために、愛情を注ぎながら根気よく育てていかななくてはならないし、そのためにはどうしても犬好きになることが不可欠だ。

少しずつ慣れていくに従い、飼い主に忠実であろうとする犬の本能も伝わり、徐々に可愛さが増してくるのを感じた。



プレゼントされた時の名は「シロ」。これは、息子が自分の飼っているものより、色が白っぽいことから付けた仮の名前だ。妻は、「タオ」という息子の犬の名が、老子の“大道”からきていことがとても気に入り、同じ「タオ」にすることに決めた。息子のタオを預かるときは、東京の「タオ」、こちらは千葉の「タオ」で区別することにしよう。

私が呼ぶときは「タオ君」、妻が呼ぶときは「タオちゃん」で、彼も自分の名前がわかっている。私たちの話す言葉をほとんど理解していて、思っていたより意思が伝わることに驚く！月日が経つにつれ、キツネ顔からだんだんふっくらと穏やかな顔つきに変ってきた。

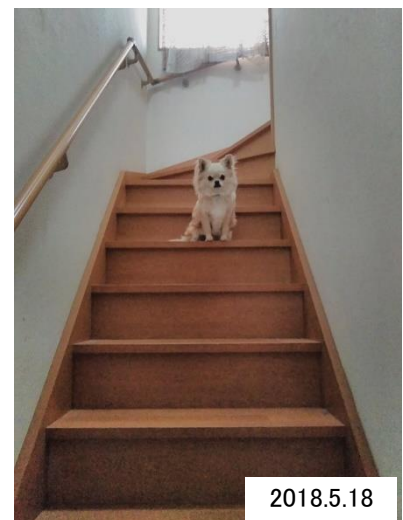
犬を飼って一番の問題は、泊りがけで家を空けられないことだ。そんな時は、専門のペット預かりか誰かにお願いするしかない。勿論いい面もある。毎日定期的に散歩する習慣がつくことだ。自分一人だとどうしても面倒になりさぼってしまうが、犬がいるとそうはいかない。

「散歩に行こうか！」というと、飛び上がって体全体で喜びを表現するのが可愛い。散歩はだいたい30分程度でいくつかのコースがある。

家から少し行くと、田圃の中にほとんど人通りのない舗装された道路があり、ロープを外し自由にさせてやる。犬も人も自分のペースで動くことができ、とても楽しい散歩ができる。

タオの散歩は“鼻で景色をみている”のではないかと思うほど、いたる所で匂いを嗅ぐ。それもいい匂いというわけではなさそうで、より犬にとって引きつけられる匂いがあるのかも知れない。

我が家は2階建て、しばらくすると階段を上ることはできるようになったが、下りることができなかった。そのうち少しずつ慣れ、途中の広くなった踊り場で一旦呼吸を整えて、次に一気に下りて来ることができるようになった。今では自由自在に上り下りでき頻繁に行き来している。



しついで一つ失敗したのは、食事どきも同じ部屋に一緒にいる習慣をつけてしまったことだ。タオは自分の食事をアツという間に終え、すぐに人の食べている分をねだりに来る。その時の鳴き声は甲高く、“キャンキャン”という耳障りな声。やはり動物は食物に対しては非常に食欲ということがわかる。

我々が外出する時など、連れて行って欲しいという態度をとるのは、家に残されるのが嫌なのだろう。それでもきき分けがよくすぐ納得する。

宅急便など玄関のインターホンが鳴ると、興奮したように吠えながら玄関に突進したり、隣の駐車場に人影が見えると大声で吠えるなど、番犬としての本能なのだろう。防犯のためにはとても頼もしいが、反面深夜に外で少しでも人の話し声が聞こえると、大声で吠えるのは困ったものだ。

妻は飼い始めてしばらく経ったころから、人の話すことが良く分かりとても賢く「可愛い、可愛い」というようになった。「どうしてお喋りできないの？」と残念そうだ。

夫婦そろって散歩に連れて行くときなど、タオもとても嬉しそうで、自分が少し先に行っては、後ろを振り返り付いて来るのを待っている。

いくつかある散歩コースも覚えていて、飼い主から離れて勝手にどこかに行ってしまうということがなく、安心して散歩できる。勿論、むやみに他人に向かって吠えることもなく穏やかな性格だ。

ある日のこと、早朝妻が散歩に連れ出した。しばらくして、玄関前で大声で吠えるタオに気付いた。いるのはタオだけで妻の姿がない。タオとしては、離れ離れになってしまい、自分だけ戻ってきたこ

とを知らせるためだったのだろう。数分後、妻が疲れ果てた顔をして戻ってきたのには私の方が驚いた。

妻の話では、“途中、新聞を取りに家から出てきた白髪の老婆の姿に驚き、タオは一目散に逃げた”とのこと。逃げたのは家から500mほど離れた場所である。そこから家への戻り道には、途中比較的交通量の多い幹線道路が通っている。その道路のどのあたりを横断してきたのだろうか？それにしても、轢かれずにうまく渡り切ったものだと感心した。当然帰り道も覚えていたわけで、思っていたよりさらに賢いことに驚かされた。

つい2週間くらい前、東京のタオ（6歳）を10日間ほど家に預かった。家のタオはまだ2歳半だが、東京のタオよりずっと大きくなってしまっている。

エサの与え過ぎに注意してダイエットも考えなくてはいけない。チワワの寿命は15、6年とのことなので、飼い主である我々とほぼ同じくらいか、我々の方が数年長く生きるかも知れない。その方がタオにとって幸せだろう。お互い、できる限り長生きしたいと思う今日この頃である。（2020.08.30）

